■ フォト・エッセイ ■

ソウェトの街角から見た南アフリカの現在

写真・文
船尾修
Osamu Funao

タウンシップ・ソウェトの典型的な住宅地。ソウェトとは、South West Township（南西黒人居住区）の略。ヨハネスブルグの南西に位置する

ソウェト。アフリカに精通している者にとって、この街の名前は一種独特のイメージを喚起させる。反アパルトヘイト運動の中心的役割を担った黒人居住区。殺人や強盗、レイプなどの凶悪犯罪が世界一多い街。前マンデラ大統領やツツ司教といったノーベル平和賞受賞者が暮らした街。拡大するエイズ渦。他のアフリカの街と違い、どこか骨太で物騒な印象が強く私の脳裏に刻み込まれていた。だから南アフリカを旅したことは何度かあったものの、ソウェトは私にとって長らく禁断の地であった。

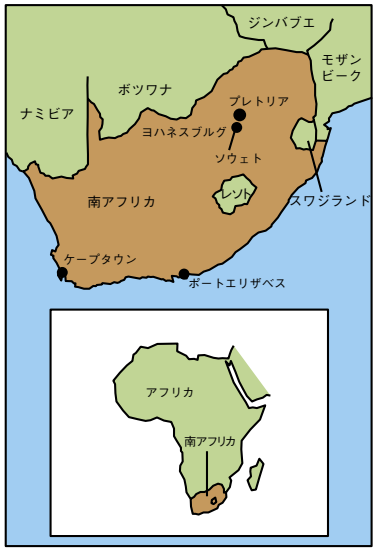
重い腰を上げることになったのは、友人がソウェトに隣接するヨハネスブルグに赴任していたからである。「ソウェトに知り合いがたくさんいるから」というので、今がチャンスとばかりに出かけることにした。ちょうどマンデラ政権が誕生した一〇年ほど前にこの国を訪れていたので、その後の変化を取材したいという気持ちを抱いていたからだ。

初めてソウェトに入ったとき、少々気抜けしてしまった。日本の郊外によくあるような建売住宅が整然と並んでおり、色とりどりの洗濯物がひるがえっている。路上では子どもたちが遊ぶ姿が目立ち、いたって平和そのものの光景が広がっていた。平屋建ての住宅に招き入れられると居間ではたくさんの人が談笑している。間取りは3DKぐらいで、日本の住宅よりも広い。漠然と貧民屈のような居住地を想像していただ

無許可酒場シェビーンでビールを飲む女。ビリヤードなどが備えられているところも多い

授業を受ける女の子。エイズの蔓延が問題となっているこの国では、小学校の校舎にもコンドーム使用の注意書きが描かれている

ビールの栓を駒にして路上で遊ぶ子どもたちの姿は、ちょっと前の日本でふつうに見られた光景だ



けに、「なんだ日本のほうがよほど貧しいじゃないか」と感じた。

しかし住み始めてすぐに、この街の失業率がとても高いことがわかった。昼間から何もせずにぶらぶらしている若い男がなんと多いことか。あるNGOで活動する人は「少なくとも六割は失業者です」と語った。

友人の紹介で下宿させてもらうことになった家は、シェビーンと呼ばれる無許可の居酒屋を経営していた。週末になると夕方から続々と人が集まり、日本と同じで飲んだり歌ったり、喧嘩したり。こうしたシェビーンはあちこちにあって庶民の憩いの場になっている。人の出入りがかなりあって、盗品を売りに来る奴や一夜限りの付き合いを求める者など、見ていて飽きることがなかった。

「オサム、カメラをしまっておきなさい。物騒だから。狙われても知らないぜ」と友人になった脚本家のケーレによく注意された。また、「絶対にひとりでは出歩かないように。絶対によ」と下宿先のママから何度も強い口調でたしなめられた。そんな大げさな、と思っていたのだが、ある日事件が起きた。毎日顔を合わせていた近所のおじさんの息子が、痴情のもつれからふたりをピストルで射殺し、自身も自殺したのである。日本だったら大事件だ。しかしこの事件はテレビでも新聞でも報道されなかった。「当たり前だろ、その程度でニュースになったら紙面がいくらあっても足りない

違法な掘立て小屋が並ぶ居住区スクォッター・キャンプでは、水道が整備されていないため、こうして順番待ちに何時間でも並ばなければならないときもある

1台の電話機があれば、タウンシップでは十分に商売となる。人々はその日を暮らすためにしたたかに生きている

すぐ近所でピストル乱射事件が起き、3人が死亡した。ソウェト郊外にある墓地で行われた葬式

ぜ」とケーレは軽く受け流した。

新生南アフリカになってから、治安の悪化は深刻度を増しつつある。失業率の増加が輪をかけているのはまちがいない。白人が支配していたころはそれほどでもなかったという。皮肉なことに、アパルトヘイトの廃絶が、失業率を高める結果になったと思われる。移動や居住地の自由といった権利を黒人から奪ってきたアパルトヘイトは、いってみれば白人の高い生活水準を維持するために、黒人を生かさず殺さずの状態で労働力として確保するためのものであった。つまり逆にいうと、たとえ権利を剥奪された状態でも白人に従っていさえすれば、食べるものも住む場所も保障されたのだ。

ところがアパルトヘイトが廃絶され移動や居住が自由になると、地方の人々は富を求めて都市をめざすことになった。しかしパイは限られている。仕事にありつけない人はタウンシップの郊外に掘っ立て小屋を勝手に建てて住み始めた。スクォッター・キャンプと呼ばれるこうした非合法の居住地は、拡大するいっぽうだ。周辺国からも安い労働力が流れ込み、南ア黒人の就業機会を奪っているのも事実である。彼らが犯罪の予備軍にならないという保証はどこにもない。

移動の自由はまた、エイズの爆発的な増加にもつながった。国連合同エイズ計画（UNAIDS）の二〇〇四年末の統計によると、世界のHIV／エイズ感染者三九

ソウェトには無許可の雑貨屋スパザがあちこちにあるが、こうして看板ひとつを掲げて副収入を得ている家も相当な数にのぼる

近所の人の結婚式に出席するため、お祝いにちょっとした演出を考えた女の子

ある演劇集団を主宰するディレクターのテュラネは、空いた公民館を借りて団員たちにレッスンをしていた

四〇万人のうち南アフリカでは五三〇万人が感染、毎年三七万人が死亡している。成人の二割以上が感染者というとてつもない数字だ。

二〇〇四年の総選挙の際にムベキ大統領の演説を聴いたことがあるが、「雇用を確保します。エイズ問題にも力を入れます」という演説にはなんら具体性がなく、聴衆が苦笑していたのを覚えている。それほど南アフリカではこのふたつの問題が手に負えないほど大きくなってしまっている。

しかしソウェトの人々は、そんな絶望的な数字よりも今日を何とか生き延びるべくしたたかに暮らしている。民家の中にスパザという小売店を出したり、野菜を売り歩いたり。ちょっとした手間賃仕事をして生活を支えている人は驚くほど多い。そしてその日カネのある奴がカネのない者の面倒を見る。そうやって互いにもたれあって生きている。明日のことは考えず、今を精一杯楽しく生きよう、と。私は彼らのこんなところにアフリカ人らしいたくましさと優しさを感じてしまう。

ケーレはディレクターを務めるテュラネと共に劇団を主宰している。どこの世界でもアーティストというものは食っていくのが難しい職業だ。でも彼らは空腹を抱えながらでも、堕落して生きるよりは表現する道を選んだ。ソウェトには暗黒だけが存在するのではない、と私は信じたい。

（ふなお　おさむ／フォトジャーナリスト）